

デスクの隅に置かれたコーヒークップには、いつ淹れたかも定かではない黒い液体が冷え切ったまま揺れている。

「はあ……終わらないなあ……」

液晶画面が発するブルーライトに射抜かれ、視界の端がちかちかと明滅していた。時計の針は午後十時を回り、フロアの明かりも私の周りを除いてほとんどが消えている。カタカタと虚しく響くキーボードの打鍵音だけが、深夜のオフィスに寂しく反響していた。

今年で入社数年目。中堅としての責任は増え、後輩のフォローと上司からの無茶振りの板挟みになる毎日。肩は石でも入ってるみたいにな固まって、首を回すたびにミシミシと嫌な音が鳴る。慢性的な頭痛はもはや日常の一部となり、思考は泥のように濁っていた。

「癒やされたい……」

そんな、独り言ともつかない掠れた声がこぼれる。今の私に必要なのは、明日を生きるための気力なんかじゃない。ただこの凝り固まった肉体をどこか遠い場所へ連れ去ってくれるような、絶対的な休息だった。

（……そんな都合のいい休息の手段なんて、もってないんだけどね）昔からずっと、自分の機嫌をとるのは苦手だった。

没頭できるような趣味もなく、適度に気分転換できるような要領のよさもなく。

かといって周りに助けを求められるような愛嬌もなく———そもそも助けを求めるだなんて発想自体、持ち合わせていない。当然だ、

こんな面白みのない女、助けたがる人間なんているわけないんだから。

溜息をひとつ、液晶画面と向き合う。ようやく最後のメールを送信し、シャットダウンのボタンを押す。

真っ暗になった画面に映り込んだ自分の顔は、驚くほど疲れ果てていて、まるでホラー映画のゾンビみたいだった。

\*\*\*

オフィスビルを出ると、冷たい夜風が容赦なく体温を奪っていく。駅へと向かう道すがら、街灯に照らされた自分の影が、ひどく頼りなく地面に伸びていた。

電車で揺られ、最寄り駅に着いたのは午後十一時過ぎ。家まで歩く

約十分の道のりが、今の私にはフルマラソンのように長く感じられる。

（まあ、だからって寄り道のアテなんかないんだけどね……）

あいにくお酒は得意じゃないから、行きつけの飲み屋なんてものは存在しない。そのうえ人見知りの私に、今の時間からアグレッシブに誘えるような友達なんているわけもなく。

それなら早く帰って寝ればいい……頭ではそう分かっている。けれど今のこの鉛みたいな重さを抱えたまま布団に入ったところで、深い眠りが訪れないことも経験で知っていた。

（……だれか、癒してくれないかなあ。なんてね）

思わずふふ、と自嘲めいた笑みが漏れてしまう。ありえない夢物語

を願う自分の思考回路がおかしくて。

——そこで、ふと。駅裏の少し古びた雑居ビルの並ぶ通りに目が向いた。

24時間営業のコンビニと、とつくに営業時間の終わったカフェの間。普段なら治安が気になって怖くて入れないような、細くて狭い路地。

いつもは決して近寄ることのないその空間が急に気になってしまったのは、入り口の横に見慣れない看板が立っているのを見つけたからだ。

（あれ？ あそこにあんな看板なんか立ってたっけ）

いつもただの風景として通り過ぎていた雑居ビルの入り口。今朝の

通勤時にはなかった……ような気がする。あのときは遅刻しそうで急いでたから、あんまり自信はないけれど。

ふらふらと近づいて、黒い背景に銀色の字で書かれた文字を読んでみた。

『究極のパーソナル・リラクゼーションを貴方へ。体に溜まった疲れをすべて消し去ります』

『初回限定特別コース。深夜24時まで受付。貴方を癒す極上のハンドテクニック』

黒い背景に、銀色の文字がきらきらと光っている。

書かれた内容を見るに、どうやらここはマッサージサロンのようだった。スタイリッシュなフォントで記された『究極』『極上』の文字

からして、仕事に疲れた社会人がターゲットなんだろう。……まさしく、私みたいな。

（こんなところにマッサージ店があるなんて知らなかったな。……24時まで受付ってことは、今ならまだいけるのかな？）

スマホの画面を確認すれば、今の時刻は23時10分を過ぎたところだった。幸い明日は休みの日で、遅刻を心配する必要もない。

今から帰っても、どうせすぐ寝るだけだ。それならちよつとくらい体を解してからの方がよく眠れる気がする。

普段の私なら、こんな路地裏の店に一人で入るなど考えもしないだろう。だが、限界を迎えた脳は正常な判断力を失っていた。『極上のハンドテクニク』という甘美な響きが、麻薬のように意識を惹きつ

けて離さない。私は導かれるように、看板の指し示すビルの中へと吸い込まれていった。

\*\*\*

エレベーターの扉が開いた瞬間、瞬きとともに小さなため息が漏れた。

（わ、すごくきれい……！）

視界へ広がるのは、外の薄汚れた通路とは対照的な、驚くほど洗練された空間。

天井から吊るされたLEDのランプは、明るいのに眩しくない。柔らかな光が、深い焦げ茶色の絨毯に柔らかな陰影を落としている。空気中には、瑞々しいシトラスに重厚なサンダルウッドを混ぜたような、



嗅いだことのない官能的な香りが漂っていた。

「——いらっしやいませ。お待ちしておりました、お客様」

奥から現れた影に、思わず息を呑む。

そこに立っていたのは、一目見て「場違いだ」と感じるほどに整った容姿の青年だった。

まず目に飛び込んできたのは、艶やかな漆黒の髪。短すぎず長すぎず、清潔感を保ちながらも、少しだけ毛先がふんわりと遊んでいる。整った骨格に、切れ長の涼しげな瞳。パーツの配置はまるで彫刻みただい。

そして何より圧倒されたのは、その体格だった。

薄手の黒い＜ネックのカットソー越しにも分かる分厚い胸板と逞し

い肩のラインに、見上げるだけで首が痛くなりそうなほどの高身長。腰回りは驚くほど細く引き締まっていて、腕を動かすたびに前腕の血管が浮き上がり鍛え上げられた筋肉が波打っているのが分かる。

これだけ見れば威圧感を覚えてしまいそうなのに、愛想のいい笑みのおかげか纏う雰囲気は何処か柔らかい。

テレビの中ですら見たことのないような圧倒的に美しい男性の姿に、私は一瞬で目を奪われてしまった。言葉を紡がない私に、彼は笑みを浮かべたまま首を傾げている。その姿にはっとして、私はどうか口を開いた。

「す、すみません……私は予約のお客さんじゃないんです……外の看板を見て、ついふらっと入っちゃって……」

見惚れていたせいでうつかり聞き流しそうになってしまったけれど、彼は今確かに「お待ちしておりました」と言った。ということはつまり、予約客が他にいたってことだ。この時間から予約なんてすごいなとも思うけれど、人の生活サイクルなんてまちまちだからそういうこともあるんだろう。

そう考えると、何も考えずその場の思い付きで足を踏み入れてしまった自分の行いが急に恥ずかしくなってくる。

「すみません、予約が入ってるならまた今度に……」

「いえ、大丈夫ですよ。予約なんて入ってませんから」

おどおどと口ごもりながら店を後にしようとする私を、男性は優しく引き止めた。

「え？　でもさっき、『お待ちしてました』って……」

「……すみません、紛らわしい言い方しちゃいましたね」

困ったように笑う彼。そんな姿さえもどうしようもなく絵になっている。目のやり場にすら困ってしまうほど。

「たとえ予約がなくとも、ここに足を踏み入れてくださった時点で僕にとっては大変なお客さんですから。お会いできるのを待ちわびていた、っていうのは、嘘偽りのない僕の気持ちなんです」

不快に思われたらすみません、そう申し訳なさそうに言う彼。

……確かに、そういうことなら意味は通っている、のか？　ただ入店しただけなのに大げさな気もするけれど……そんな率直な気持ちを目の前の彼に伝えるのは、なんとなく気が引けた。

「あ、はは……ありがとうございます。私はなんにもしてないですけど……」

「とんでもない。むしろすごく嬉しいですよ。お客さんが来てくれなきゃ、マッサージ店として営業も出来ませんしね」

「むしろありがとうございます、———このお店を見つけてくださって」

私の緊張を解すように、男性は穏やかな声で語りかけてくる。その優しい微笑みに、とくと心臓が跳ねた。

見つけてくださった、だなんて。ただふらっと入っただけなのに、なんだか照れてしまう。

頬の熱さを誤魔化すのに必死な私は、そうして促されるまま店の中

へと足を踏み入れてしまふのだった。

\*\*\*

「はじめまして、僕は瀬名っていいいます。この店の店長兼専属エステティシャンをやっています」

私をカウンセリングブースへと案内してくれた彼は、胸に着けられたネームプレートを指差しながらそう名乗った。

ブース内に置かれたソファはふかふかで、座っているだけで全身が沈み込んでしまいそうだ。アロマだろうか、辺りには良い匂いも漂っている。

「なんだかお疲れみたいです。よければハーブティーでもお持ちしましょうか」

「あ、ありがとうございます……」

目の前のローテーブルに、湯気の立つマグカップがことんと置かれる。ぺこぺこと恐縮しながら口をつけてみれば、熟した果実のような甘い香りと風味が鼻へと抜けていく。

「……美味しい」

「ほんとですか？　よかった。気に入ってもらえたなら嬉しいですよ。それ、僕が直々にブレンドした当店オリジナルのハーブティーなんですよ」

ぽつりと溢した瞬間、涼やかな目元が嬉しそうにきらきらと瞬いた。彫刻みたいに整った顔が、ほんの少し幼くなる。気を抜くとどこまでもじろじろ見てしまいそうで、慌ててカップへと目を落とした。

当店オリジナル。言われてみれば確かに、今まで生きてきて飲んだことのない味だ。ハーブティーの知識なんて全然ないから当たり前のことかもしれないけれど。

甘やかな舌触りは、一口含むごとにこわばった私の気持ちをほぐしてくれるみたいだった。

「こちら、メニュー表になります」

ほっと一息つく私の前に、メニュー表が差し出される。

「うちの店の施術は、一般的なリラクゼーションとは一線を画します。お客様の筋肉の状態、リンパの流れ、そして神経の過敏さに合わせて、最適な圧とストロークを選択します」

「神経の……過敏さ？」



「ええ。表面的な凝りを解すだけじゃ、根本的な解決にはなりませんから。もっと深い、意識の奥底に澱んでいる疲れまで掬い取って癒すのが、うちの店の施術です」

彼の言葉は穏やかで、けれどその口調は自信に満ちていた。優しく深みのある声で語られるその言葉たちが、疲れた脳みそに優しく響いていく。

「意識の奥底に澱んでいる疲れ、かあ。確かにあるかも。最近ずっと残業続きだったから……」

はは、と自嘲まじりにぼやく。その声は、自分で思っていたよりもずっと弱々しかった。

「って、すみません変なこと言っちゃって」

なんとなくきまりが悪くなって、愛想笑いと一緒にぺこりと頭を下げた。

（何やってるんだろ、私。こんな初対面の女の愚痴なんか誰も聞きたいわけないのに。お仕事で優しく勧誘してくれてるんだから、早く返事しないと……）

「えっと、なのでぜひ施術を……あっそうだお金って前払いで、」  
「すみません」

慌てて財布を取り出そうとした私を遮ったのは、瀬名さんの穏やかな声だった。

メニュー表を持つ私の指先に、優しいぬくもりが重ねられる。手を握られているのだと気付いた瞬間、体温が一気に上がるような心地が

した。

「へ!? あ、あの……」

「——変なことなんかじゃないですよ」

顔を上げれば、悲しげに眉を寄せる美しい顔が視界いっぱいに映った。……思わず息を呑む。まるでドラマのワンシーンみたいだ、相手が私であることに目をつむれば。

「変なことなんかじゃないです。疲れちゃうのは、貴方が日々頑張っている証ですよ」

「変なことを言ってますみません」、そう自虐したことを諫められているのだと、私はそこでようやく気付いた。イケメンに触れられて停止した思考が、どうにかこうにか動き出す。

「あ、はは……ありがとうございます。でもほら、私社会人なんて仕事頑張るのは当たり前っていうか、疲れてるのも私が自分の機嫌とるの下手くそってだけだし……」

どきどき、どきどき。鼓動は煩いほどに高鳴っている。

喋りすぎている自覚はあった。さっきよりもはるかに変なことを口走りすぎている。

いくら気持ちが浮ついてるからって、こんなのダメだ……そう思うのに、止まらない。瀬名さんの真剣な表情にあてられて、何かの箍が緩んでしまったみたいだ。

「社会人だから頑張るのが当たり前だなんて、そんな決まりはどこにもないですよ。優しい人ほど自分を後回しにしがちですけど、もつと

自分を労わってあげてください。きちんとリフレッシュした方が、仕事だって頑張れるはずですから」

情けない私の姿を、瀬名さんは一度も笑わなかった。部屋の中に漂うアロマにも似た優しい声がまっすぐに胸へと届いて、思わず視界がぼやけそうになる。慌ててメニュー表に目をやって、どうにか誤魔化した。

「——そう、ですね。それならせっかくだし、癒されてみたいかも」

『180分フルコース』、高級感のあるフォントで書かれた文字列を指さしながら告げる。

（ああ、そっか。私ってそんなに疲れてたんだな。癒しが欲しいっ

て、心の底から思うくらいに)

口に出してみても初めて、自分の気持ちがつとんと胸に落ちたような気がする。……自分のことなのに、我ながら鈍すぎるな。

「フルコースですね。……ふふ、嬉しいです。癒されたいって、思っ  
てくださっただけですね」

私の指さした先を見て、形のいい唇がふ、と緩んだ。思わずかっ  
と体が熱くなる。

嬉しいですだなんて、リップサービスにしてもやりすぎなんじゃない  
だろうか。うっかり勘違いして痛客になりそうで怖い。気を付けな  
いと……!

「期待しててくださいね。体に溜まった悪いものすべて、僕が出して

差し上げますから」

私の気持ちなんて知る由もないまま、柔和に微笑みながら瀬名さんは言う。

「……瀬名さんがやってくれるんですか？」

言ってから思った。……やばい、今のキモかったかな。

私の声音は、自分でも分かるくらいに明らかに浮ついていた。これじゃまるで期待してるみたいだ。言ったそばからなにやってるんだ自分。

「ええ、もちろん！　僕が責任を持って施術させてもらいますよ。なんせこのお店、ぜんぶ僕一人でやってますから」

気まずさに負けて目を泳がせる私に、瀬名さんはこやかに答えて

くれた。

嫌な顔をされなくて安心した半面、聞こえた言葉に思わず目を丸くしてしまう。

「え、ぜんぶ一人で？」

「はい、そうです。受付も施術するのもぜんぶ僕だけ。

ほら、今も他に誰もいないでしょう？」

瀬名さんに促されて辺りを見回す。

言われてみれば確かに、広く清潔な室内は私と彼のふたりきりだった。

お客さんがいないのは時間帯の問題だとして、スタッフさんがいないのはてつきり奥で何か作業でもしているからだと思っていなければど



……どうやら違っただけらしい。

「すごいですね、ひとりでぜんぶやるなんて。ただでさえ人気すごそうなのに……」

「それがそうでもないんです。実は全然お客さんに来てもらえなくて」

そう言いながら、瀬名さんは困ったように眉を下げた。黙っていると綺麗な顔が、一気に可愛い雰囲気帯びる。

「え、うそ。絶対女性客に大人気だと思ったのに」

「そう言ってもらえて嬉しいんですけど、実際は全然で。……仕方ない話ではあるんですけどね。基本的に、宣伝にはあんまり力を入れてませんから」

SNSとか、そういうのには疎くて。何処か恥ずかしそうに瀬名さんは言う。

なるほど全然宣伝してないからか。……それでもこれだけイケメンな店長さんがいたら、口コミで広がりそうだけだなあ。

「——でもだからこそ、このお店を見つけて来てくれたお客さんには心から感謝してるんです。

満足してもらえるように頑張りますから、期待してくださいね」

「……っは、はい……」

艶やかな黒い瞳が、微笑みとともに細められる。

さらりと言われて、思わず頬へと熱が集まってしまうのを止められ

ない。

（全然詳しくないけど、この人が言うならきつとすごく効果のあるマッサージなんだろうな）

室内に漂う甘い香りを吸い込みながら、ふわふわした頭のままそんなことを思った。

「こちら、施術に関する同意書になります。もしこちらで施術を受けていただけるのであれば、内容をご確認の上サインをお願いします」  
差し出されたタブレットには、びっしりと細かい文字が並んでいた。

同意書、サイン。そんな言葉を聞いて、ほんの少しだけ背筋が伸びてしまう。

（ここにサインしたら、マッサージに同意したことになるんだよね。

……ふたりっきりの店内で……男の人に……）

心の中でそう呟けば、タッチペンを握る指にほんの少しだけ力がある。……心なしか、辺りの静けさが耳につくような気がした。

（つて、何考えてるんだろ私。ただのマッサージなのに意識しすぎだつてば）

よくない方向へ回りかける思考を打ち切るように、心の中で自分へと突っ込みを入れる。

ふたりきりになるなんて知らなかったとはいえ、お店に足を踏み入れたのは私自身なんだから。いかがわしいお店でもなんでもないので、変に意識するなんて、真面目にやってる瀬名さんに失礼だろう。

頭ではそう分かってゐるのに。

「……怖いですか？」

ペンを握る私の顔を、瀬名さんが遠慮がちに覗き込む。八の字に下がった眉とともに、口元には寂しげな微笑みが湛えられていた。

（やばっ、もしかして意識してるの顔に出ちゃってた！？）

「い、いやそんなことは……！」

「いえ、どうか気にしないで。怖くなって当然です。いくらマッサ―ジとはいえ、こんな夜遅くに男とふたりきりだなんて」

「いや……その、そういうわけじゃ……」

真剣な表情で理解を示されて、ますます申し訳ない気持ちになつてしまう。

怖いのは間違いない。こんな夜中に男のひととふたりきりになるとについて、女としてどうしても警戒してしまう気持ちはある。

けれど——怖いのは、それだけじゃない。

（こんな素敵な人とふたりきりで、ましてや体に触れられるなんて

……！　なんか変なふうに反応しちゃったらどうしよう……！）

こうして話してるだけでもどきどきしちゃうのに、なんて。考えるたび罪悪感が募る。見つめる彼の瞳はどこまでも真摯で、目の前の客がこんな不埒なことを考えてるなんてきつと想像もしてないんだろう。絶対知られたくない。

気まずさで俯きそうになる私に、彼は「お約束します」と穏やかな声で続けた。

「もし貴方が少しでも不快な気持ちになったり恐怖を覚えた場合、その場で施術を中止します。もちろんそのときは、お代はいただきません」

「マッサージ中、お客さんの意思を無視して何かをすることもありません。逐一ヒアリングをして、貴方の意思を尊重しながら進めていきます」

優しく、それでいて何処か力強い声が耳に触れる。

「あ……ありがとうございます。よろしくお願いします……！」

「本当ですか？ ……ふふ、よかった」

瀬名さんの言葉に押されるようにして、私は躊躇いがちに頷いた。元から断るつもりなんてなかったけれど、それ以上に彼の真剣な瞳が

悲しげに染まるのを見たくなかったから。なんて、ただの営業トークに大袈裟かもしれないけれど。

「それでは改めて、内容をご確認の上、同意書にサインをお願いいたします」

「は、はいっ」

瀬名さんに促されて、私は慌ててペンを握り直した。テーブルに置かれた同意書へと目を落とす。白い紙に記された文字は大きすぎず小さすぎない読みやすいサイズで、内容は私みたいな人間にも理解しやすい平易な文章で書かれていた。

『個室での施術に同意すること』

『施術中の反応は心身の解放によるものであり、セラピストにすべて



を委ねること』

『効果には個人差があり、深い弛緩状態に伴う一時的な意識の混濁を了承すること』

――、？

くらり、脳みそが揺れる。部屋に漂うアロマの匂いが心地いい。

何もおかしいことは書いてない、はずだ。だからそう、早くサインしなきゃ。

そう思うのに、何故だか指が動かない。

「……どうしましたか？」

瀬名さんの声。落ち着いた低い音とともに、指先へ温かな感触が触れた。

見れば、ペンを持つ私の手に瀬名さんの指が重ねられていた。

「ご気分が優れませんか？　それなら力を抜いちゃって大丈夫ですよ。僕が代筆しますから」

細く滑らかな、それでいて骨ばった男の人の指。

どくん。思わず心臓が跳ねる。

――この指がこれから、わたしのからだを、――

もしかしたら、もっと他に考えなきやいけないことがあったのかもしれない。

ふわふわと揺れる意識の奥底では、警告のアラームが鳴り響いていたのかもしれない。

けれどこの瞬間私が認識していたのは、そんな浅ましい感情だけだ

った。

「同意書の中身は全て確認しましたか？」

「……はい」

「書かれた文言全てに同意しますか？」

「……はい」

「その言葉を今後一生、違えないと誓いますか？」

「………、」

「誓いますか？」

「………？♡は、い……♡」

「ふふ、よかった♡いや、まだ気の早い話ではあるんですけどね。一

応の確認ってことで♡」

さらさらと、名前の欄が埋まっていく。

私は手に入力していない。瀬名さんの綺麗な指がするすると動いて、気付けば記名が終わっていた。

自分の名前が記された同意書を見下ろして、私はゆっくりと瞬きをする。

（……………あれ？　　そういえば私、名前言っただけ……………？）

「……………ご記入ありがとうございます。これで契約成立ですね」  
瀬名さんの言葉に、ふわふわと揺れていた思考が引き戻される。

そうだ、細かいことを気にしてる場合じゃない。サインしたってことは、つまりこれからマッサージが始まるってことなんだから。

「それじゃ、個室へご案内しますね。お荷物はこちらのロッカーでお

預かりします」

「あ、は、はい！ ……その、よろしく願います」

置いていた荷物を渡しながら、ぺこりと頭を下げる。そんな私に、瀬名さんは満面の笑みで応えてくれた。

「ええ、こちらこそ。誠心誠意ご奉仕いたしますので、どうかよろしく願いますね♡♡」

\*\*\*

「では、こちらへ」

案内された個室は、清潔感の行き届いた綺麗な部屋だった。シンプルで物の少ない部屋の中央に、人が乗れるサイズの施術台が置かれている。

「着替えが終わったら、室内でお待ちくださいね」

彼が部屋を出るのを見送って、私は足元のカゴに入っていた着替えを手にとった。

瞬間、目を疑う。——そこに置かれていた「施術着」は、今まで生きてきて見たこともないほどに頼りないものだった。

「な、なにこれ……」

私が今手に持っているのは、一着のショーツだけ。カゴの中には、その他のものは入っていなかった。

それだけじゃない。そのショーツは生地があまりにも薄かった。下手したら透けて見えてしまいそうだ。

その上布面積まであまりにも心許ない。かろうじて割れ目を覆い隠

すくらの面積しかない上に、腰回りを支えているのはなんと布ではなく細い紐だった。

いわゆる紐パン、ってやつ。少し指をかけたら、呆気なく落ちてしまっただろう。

「あ、あの！ 瀬名さんすみません！」

「はい、どうしました？」

たまらず、部屋の外で待機している瀬名さんへと声をかけた。きっとこれは何かの手違いだろう。入れ忘れたか、入れ間違えたか。……入れ間違えたとしたらこのショーツは瀬名さんの私物？ いやそんなわけないか。

でもとりあえず、早くちゃんとした施術着を受け取らないと。

「あの、すみません。実はその、カゴに入ってた施術着？がちよつと、おかしくて……」

「おかしい？」

「はい。その、下着しか入ってなくて……その下着もなんというかこう、頼りないっていうか……多分これ入れ間違いですよね？ ちゃんとしたやつをもらいたいんですけど……」

「ああ、なるほど！ でしたらご安心ください、その紐パン一枚で合ってますよ」

「……………え？」

納得がいったという様子の声に安心したのも束の間。返ってきた言葉に、思わず間の抜けた声が漏れてしまった。



これで合ってる？　　どういうこと？　　こんな紐パン一枚でいわけな  
くない？

あまりにも頼りなさすぎる布を手にしたまま絶句する私。表情は見  
えていなくとも考えていることを察したのか、ドア越しに瀬名さんが  
続ける。

「すみません、説明が足りていませんでしたね」

説明とかそういう問題なのか……？　　なんて思いつつも、彼の申し  
訳なさそうな声を聞くとなんとなく戸惑っていた気持ちが少し和らぐ  
ような気がした。

「それが正式な施術着なんです。リンパの詰まりを流してすっきりさ  
せるためには、お客さまの肌と直接触れ合える面積を増やした方がい

いで」

「な、なるほど……」

落ち着いた声で説明されて、思わず頷いてしまう。確かにそう言われれば、理にかなってするような気もしてくるけれど……いやかなって  
るか？

「もちろん、施術の際にはきちんと配慮させていただきます。施術台  
に上がる際はうつ伏せ状態でスタートしますから、お胸が見えてしま  
うこともないですよ」

ドア越しに聞こえてくる穏やかな声が、困惑していた気持ちを落ち  
着かせてくれる。お胸が見えてしまう、だなんて、そんなフレーズを  
彼に言わせてしまっていること自体がそもそも恥ずかしくていたたま

れないんだけども。

説明を受けてもまだ完全に納得しきれない私に、瀬名さんは言葉を続ける。

「——それでも、そうですね。その施術着を着るのが難しいということであれば、こちらで別のものを用意いたします。ただその場合、マッサージの効果は100%発揮するのが難しくなってしまうですが……」

「え、」

別のものを用意します。聞いたかった言葉のはずなのに、何故か即答できなかった。

マッサージの効果は100%受けられない、それがただ純粹に残念

だったから……だけじゃない。聞こえた瀬名さんの言葉が、どこか悲しげに聞こえたからだ。

「満足してもらえるように頑張りますから、期待してくださいね」  
ついさっきそう言っていた彼の言葉を思い出す。SNSに疎くてあんまり宣伝できていない、でもだからこそ、見つけて来てくれたお客さんには心から感謝していると言っていた彼の表情を。

それなのに、お客さんである私が100%の力を彼に出させてあげられないなんて。

「……あ、あの、」

「すみません。すぐに替えの施術着をお持ちしますので、少々

「……………いや、やっぱり大丈夫です。このままマッサージを受けます！」

遠ざかりかけた足音を、意を決して呼び止めた。ほんの一瞬沈黙が落ちる。……逆に気を遣わせてしまったかもしれない。

「……………いいんですか？ 確かにそうした方が遥かに効率的ですが、貴方が無理をする必要はありませんよ。お客さまの気持ちを考えずに案内を怠ったのはこちらの不手際ですから」

躊躇いがちな声。ドアの向こうで申し訳なさそうな顔をしている瀬名さんの姿が目に見え、思わず心がちくりと痛んだ。

（こんなふうに言ってくれる人が変なことするわけないもんね。疑ったわけじゃないけど、変に騒いじやって申し訳なかったな）

「いえ、大丈夫です。どうせなら全力で癒されたいので！」

罪悪感を拭うように明るく返せば、ふふ、と小さく笑うような声が壁越しに返ってきた。

「——やっぱり、貴方にして良かった」

「え？」

あれ、今何か言われたような。上手く聞き取れなかったけれど……まあ、きっと私が気にすることじゃないよね。

「ご協力感謝します。それじゃ改めて、着替えが終わったら声をかけてくださいね」

「はい！」

\*\*\*

(こ、これは流石に……)

手に持った下着を眺めながら、何度目かもわからない眩きを零す。  
やっぱりどこからどう見ても、まともな施術着とは思えない。マッサージを受ける人って、皆こんなものを着せられてるんだろうか。本当に？

(でも、これが普通なんだよね……)

ごくり、唾を飲む。

そうだ、きつとこれが普通なんだ。私がマッサージに馴染みを持つてなかっただけで。

だって瀬名さんが変なことをするわけない。さっきだってあんなに

真剣に、私の体を氣遣つてくれたんだから。

（大丈夫、全然恥ずかしくなんかない！　ただの施術着なんだから！）

そう自分に言い聞かせながら、極薄の布地に足を通していく。

……そうしてどうにか着替えを終え、私は自分の体を見下ろした。

私の願いも虚しく、そこにあつたのは想像よりもさらにひどい光景だった。

（うつ……！　なにこれ、いくらなんでもやばすぎる……！）

見下ろした先、あまりにも無防備な二つの膨らみが揺れている。ブラもシャツも何も着けてないんだから当然だ。そしておまけに、膨らみのてっぺんにある突起はぽちりと形をもって主張していた。

（いやこれは勃つてるとかじゃなくて、格好のせいですーすーしてるせ



いだけど！　って、誰に言い訳してるんだろ私……）

恥ずかしい部分を片腕で隠しながら、心の中で溜め息を吐く。……  
とはいえ、問題はこれだけじゃない。むしろやばいのはここからだ。

（これ、どう考えても全然隠れてないよね……？）

何も着けていない上半身と同じか下手したらそれ以上に、下半身も  
すーすーしている。当然だ、今の私はあの頼りない紐パン一枚しか着  
けてないんだから。

ついさっき「割れ目しか覆い隠せないんじゃないか」なんて考えた  
けれど、あれは間違いだった。実際は割れ目すらもちゃんと隠れてい  
ない。むしろ気を抜くとどんどん布が食い込んで、くつきりと割れ目  
を主張してしまうのだ。

そのたびに指で引っ張って戻さないといけないけれど、そうすると腰回りの紐が解けそうでハラハラする。

結果的に、つい内股でもじもじしてしまう。まるでお漏らしを我慢してゐたいだ。こんなのいくらなんでも恥ずかしすぎる。

（こ、こんなのいくらなんでも流石に無理だつて！ やっぱり瀬名さんに言つて……いやでもそれは……）

固めたはずの決意が揺らぎかけたその瞬間、こんこん、とドアを叩く音がした。思わずびくりと肩が跳ねる。

「着替えの方終わりましたか？ ドア開けさせてもらいますねー」

「へ？ あ、いやちよつ——、」  
がららつ。

すみません、この格好はあまりにも恥ずかしいので別の施術着を借りてもいいですか？

言うつもりだった言葉は声にならず、代わりに口から漏れたのは間拔けな悲鳴だった。

開いたドアから、瀬名さんが顔を出す。返答を待たずにドアを開けられるなんて思っていなかった私は焦って、逃れるように咄嗟に腕で胸元と脚の付け根を隠した。……いや嘘、全然隠れてない。

咄嗟に腕で胸元を隠したはいいいけれど、他に何も着けていないせいでおへそは丸見えのまま♡♡

もちろん下半身だって同じだ。どうにかして手で割れ目を隠してるけど、前屈みで太ももをびったり閉じながら手で割れ目を隠してるこ

の状態そのものが死ぬほど恥ずかしいんだから♡♡

「あ、あのっ……！ や、やっぱりこれ……♡♡」

「おお、無事着替えも終わったみたいですね。それでは施術台へどうぞ」

こちらへどうぞ——そんな言葉に、思わず耳を疑った。

目の前の客が明らかに異常な格好をしてるのに、どうしてそんな普通でいられるんだろう？

「いやちよ、ちよっと待ってください……！♡♡」

「？ どうしました？」

慌てて声を上げた私に、瀬名さんは小さく首を傾げながら答えた。

まるでおかしいことなんか何一つないみたい。

「あ、あの……用意してもらっておいであれなんですけど、やっぱりこれその、ちょっとおかしいなって……生地も薄いし、サイズも合っていないっていうか……」

「？ いえ、何もおかしくなんかありませんよ。むしろとてもよくお似合いです」

瀬名さんの言葉に思わず耳を疑う。よくお似合って、これが？ そんなわけなさすぎる、どういうこと？

（……いやでも、ひよつとして私がおかしいのかな？）

戸惑うわたしの中に疑問が生まれる。

だって私、マッサージとかあんまり行ったことないし。どうするの  
がセオリーとか全然知らないし、ひよつとしたらこの格好も割と普通

だったりするのかな。

冷静に考えたら絶対にそんなわけはないんだけど、このときの私はその可能性を捨てきれなかった。

どうしてだろう？ ……なんて、分かりきってることなんだけど。

（だって、瀬名さんが嘘なんか吐くわけないもんね）

あんなに真面目に私のことを労わってくれた彼が、私に対して嘘を吐くわけがない。だからきつとそう、私の方が無知なだけで、この格好もきつと一般的なものなんだ。恥ずかしがる方がおかしいんだ。

心の中で自分にそう言い聞かせて、促されたとおり中央の台へと上がる。指示されるままうつ伏せ状態で台の上に寝転ぶと、上から瀬名さんの声が降ってきた。

「それでは始めていきますね。お手洗いにいきたい等ありましたら遠慮なくお声がけください。

それと、施術には専用のジェルを使用します。こちらはリラックス効果のあるものですが、最初は少し冷たいと感じるかもしれません。すぐに温まりますので、少しの間だけご辛抱ください」

「は、はいっ」

マッサージをされるだけなのに、緊張で思わず声が裏返りそうになってしまった。顔が見えてなくてよかったと安堵しているうちに、骨ばった男の人の指がそっと私の背中へと触れる。

「……………」

肌に感じる、しっとりとした感触。言われた通り最初は少しひんや

りとして、けれどすぐに手のひらの熱で温まっていくのが分かる。

（あったかい）

ほっと息を吐きながら思う。施術着のせいですーすーしていた体が、柔らかなヴェールに包まれていくみたいだ。

時折背中の中のツボを押し込む指の動きも、力強いのにちっとも乱暴じゃない。皮膚の下の強張った筋肉が、みるみるうちに解されていく。

「ふ、んん……、はあ……」

「どうです、体が温まってきているのが分かりますか？」

「は、はい……」

頭上から降ってくる瀬名さんの声。まだ時間は少ししか経っていないのに、それを聞く私はすでに脱力しきっていた。心も、体も。うつ



ぶせのままだらんと体を投げ出して、ふわふわとした気持ちのまま答える。疲れも凝りも気付けばほとんど消えてなくなっていて、体はぽかぽかと心地のいい温かさに包まれていた。

（マッサージがこんなに気持ちいいなんて……なんでもっと早く来なかったんだろ……）

こんなに簡単に日頃の疲れをぜんぶ癒してもらえるなんて、これまでの人生まるごと損してた気分だ。

「ふふ、よかったです。……それじゃ、体も温まってきたみたいなので次の段階へ移りますね」

次の段階？　なんだろ、もっと体を解せるようなマッサージがあるんだろうか。分かんないけど、瀬名さんが言うならきつとすごく効果

のあるものなんだろう。……そう思って、身を預けようとして。

「では次、仰向けの体勢になってみましょうか」

「……え、」

降ってきた言葉に、ほんの一瞬だけ時が止まった。

仰向けの体勢。いや言ってる意味は分かる、分かるんだけど。

（仰向け……ってことは、ぜんぶ見られちゃうってことだね……ベツドで体を隠せなくなっちゃうから……）

気付けば無意識に、太ももへぐつと力を込めていた。いや本当に、やましいことなんかひとつもないんだけど。だってただマッサージを受けてるだけだし、さっきから体もぽかぽかしてなんならちよつと汗ばんできてるけど、それは瀬名さんがリンパの詰まりを流してくれて

血行が良くなってるからだし。

でもその、やっぱり今の私は上になんにも着てないわけで、明るいの下で私なんかの体を瀬名さんに見られるのは――、

「……お返事がないみたいなんで、手伝って差し上げますね♡♡」

「へ？　――きやあっ!?♡♡」

ぐるぐると回っていた思考が断ち切られる。――台と体の間に差し込まれた、瀬名さんの手によって。

ふにゅん♡♡♡♡

「っひ、――♡♡」

（わ、私のおっぱい♡♡瀬名さんの腕に当たっちゃってるっ♡♡）  
ぽっちり浮いた胸の突起が、男の人の逞しい腕に潰されてしまう。

ほんの一瞬背筋を駆け抜けるぞくぞくとした感覚に、思わず息を呑む。

そしてそのまま体をぐっと動かされて、気付けば私は台の上で仰向けの体勢になっていた。

「あのっ！ い、いま……」

「すみません、仰向けになるのが難しいみたいだったんでお手伝いさせてもらいました。気付けなくてすみません。力抜けすぎちゃいましたかね？」

「い、いやその……ありがとうございます……」

見上げた先、微笑む瀬名さんの表情には何の屈託もない。

マッサージのおかげで力が抜けちゃってて仰向けになれなかったと

かじゃないんです、体を見られるのが恥ずかしかっただけです

——なんてことは、とてもじゃないけど言えそうになかった。

「さて、それじゃ続きを始めていきますね。……つと、すみません。少し手を退けさせてもらいますね」

「へ？ ひゃっ……♡♡」

とっさに胸を隠していた腕を優しく掴まれる。一瞬のことで抵抗しようにも間に合わず、LEDの明るい光の下でふると揺れるふたつのふくらみがあっさりとあらわになってしまった。

「や、やだみないでっ♡♡」

「どうして？ 隠そうとする必要なんてありませんよ。皆さんやっ  
て  
る  
こ  
と  
で  
す  
か  
ら」

恥ずかしさから思わず涙目になる私に、瀬名さんは優しく微笑みかけながら「ああでも、」と続ける。

「少し凝りが酷くなっているみたいですね。仕方ない、予定を変更して、先にこちらを解していきましようか」

「へ？ 先に、って——、」

そんなに凝りが酷い場所なんて、残ってたっけ？ 肩も背中も張ってた部分は見事に解されてとろとろになっちゃって、何なら今は上手く力が入らないくらいなのに……。

不思議に思いながら、私は瀬名さんが準備をする姿をぼんやり眺めていた。

隣に置かれたワゴンから、金属製のチェーンのようなものを取り出

す彼。

……え、チェーン？

かちり。

「……へ？」

場違いな金属音とともに、閉じていた両脚がぐい、と開かされた。そしてそのまま、剥き出しの太ももへ何かが装着される。……ひやりと冷たい。

咄嗟に身動きしようとして——足を動かせないことに気付いた。

頭を起こして下を見る。剥き出しの太ももに、足枷のようなものが嵌められていた。

さあ、と血の気が引いていくのを感じる。

「ひっ……!?! きゃっ、なにこれ!? やだ、はなしてっ」

「だめですよ、勝手に動いちゃ。危ないですからね。ほら手の方もまとめておきましょうね。はい、ばんざーい♡♡」

抗議のために伸ばした手をあつさりと掴まれて、頭の上でまとめ上げられたまま拘束されてしまった。

一瞬すぎてろくに抵抗も出来ないまま全ての動きを封じられ、私は信じられない気持ちで彼の美しい顔を見上げることしか出来ない。

「な、なんなんですかこれ……! こんな聞いてない……!」

「すみません、これはうちの決まりなんですよ。ここからの施術は、お客さまの体が自然と動いてしまう可能性があるのです……安全のため



に拘束させていただいてるんです」

なんだそれ。何を言ってるのか全然分からない。

分からないけれど、このままじゃやばいということだけは理解出来た。……やっぱりこんなところでマッサージなんて受けるんじゃないかなった。

早く逃げないと、けれどどうやって？こんなにかっつり拘束されてるのに、いやでも……。

—— きゅむっ♡♡♡♡♡

「っ、ひ!?!?♡♡♡♡♡」

そんな私の思考は、次の一瞬で呆気なく霧散した。

……………ジェルを纏った手で胸のてっぺんを優しくつままれる、そ

の刺激によって。

すりすり、すりすり♡♡

しゅりしゅり、しゅりしゅり♡♡

「ほらやっぱり、自然と体が動いてしまってますね♡♡拘束しておいて正解でした♡♡

にしても……思った通り、お胸のてっぺんが相当凝ってしまっているようです。こちらマッサージで解していきますからね♡♡まずはこうして指先で優しく、くすぐるようにこしょこしょ♡♡とあやしてあげます♡♡どうです、ちゃんと解れてますか？♡♡」

「んあつ、え？♡♡んや、なにっ♡♡あっ♡♡」

な、なにこれ♡♡どういうこと？♡♡私何されてる？♡♡

突然のことに、頭がぜんぜん追いつかない。分かるのはただ、胸元に這わされた指に胸の突起をつままれて、思わずがくがくっ♡♡と腰を跳ねさせてしまったことと、手入れの行き届いたその指が動くたびになんだかびりびりした刺激が背中から這い上ってきてることだけ



「ま、待っ——♡♡」

「はあい、お次は少し強めに爪先でかりかり♡♡してみましようか。ぬるぬるのジェルをつけた指でやってますから、こうして突起を上からくりくり♡♡しても痛くはないですよね？むしろ体の芯からぽかぽか♡♡ってあったかくなってくるんじゃないかな？どうですか？」

「ふ、んんっ♡♡そ、んなっ♡♡んあっ♡♡」

かりかり♡♡かりかり♡♡

くりくり♡♡くちゅくちゅ♡♡

どうにかして止めてもらいたいのに、いつの間にか口からは耳をふさぎたくなるような恥ずかしい声が漏れるようになってしまった。

しかもそれだけじゃない。彼の言葉を裏付けるように、体の奥底からじんわりとした熱が湧き起こってくる。それになんだか、肌のすぐ下がぴりぴりむずむずしてきたような。

なんだこれ、私の体に何が起こってるの……？

「ああそうだ。言い忘れてたんですが、このジェル実は特別製です。触れた部分が敏感になっちゃう効果も持ってるんですよ。ほら、こうして突起をこねこね♡♡するたびにむずむずしちゃうでしょ？

♡♡」

「ひうつ♡♡な、なにそれ♡♡そんなのきいてな……んああ♡♡根元かりかりやめてえ♡♡」

とんでもないことを後出しで言われて抗議したいのに、瀬名さんが指を小刻みに動かして乳首の根元をくすぐってくるせいで泣き言しか出てこない♡♡ぞわぞわ♡♡ぞくぞく♡♡と込み上げてくる甘い熱に抗うように、ぎゅつと目をつむりながら口を引き結ぶ。……そんなことをしたって、情けない声が漏れるのは止められないんだけども。

かりかり♡♡くりくり♡♡

くちゅくちゅ♡♡すりすり♡♡

「ふうっ♡♡ん、んぐ……♡♡く。あぁ♡♡」

「ふふ、良い感じに解れてきましたね♡♡ご協力ありがとうございます♡胸の突起もこんなにぷっくり美味しそうなかたちになって、とってもいい傾向ですね♡♡」

「へっ!?♡♡い、いやっ♡♡そんなわけな、んひいっ♡♡おしつぶさないれ♡♡」

解れてきた？ 何を言ってるんだろう。私の乳首はさっきから触られるたびにじんじんと熱を持ってしまっ、見なくても分かるくらいにぷっくり腫れてしまっているのに。

それに気のせいだろうか、さっきから瀬名さんの機嫌がどんどん良くなっ、いって、る気がするのが恐ろしい。

「それじゃ、お次はこちらを解していきましょうか」